

---

# クリスマスプレゼント

忍野佐輔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クリスマスプレゼント

### 【ISBNコード】

N4901V

### 【作者名】

忍野佐輔

### 【あらすじ】

山崎総一郎はクリスマスプレゼントを抱えて“ある場所”へと向かう。

そこで彼は、逆にクリスマスプレゼントを受け取る事になる……。

習作の掌編です。

所属サークルHP等でも掲載しています。

同人サークル【結晶文庫】

「プレゼント用の包装はなさいますか？」

「あ、お願ひします」

「包装紙とリボンの色はいかがなさいますか？」

「……あー、娘に贈るんですけど、どれがいいですかね？」

「それなら……こちらと、こちらの組み合わせでいかがでしょう？」

「じゃあ、それで頼みます」

店員から綺麗に包装されたプレゼントを受け取り、山崎総一郎は店を後にした。

クリスマスの大通りは華やかな飾り付けが施され、歩く人間達すらも色鮮やかに彩られている。そうやって飾り付けることで、北風の寒さを忘れようとしているのだろうか。

山崎はそんなことを考えながら、タクシーをつかまえて急いで車内に乗り込む。

タクシーの運転手は、山崎の抱える荷物を見て笑いかけてきたが、行き先を聞くと気まずそうに黙ってしまった。運転手の気まずさは理解できるので、山崎も特に何も言わず車の振動に身を任せた。

タクシーは目的地の少し手前で止まった。

山崎はプレゼントを抱えて降りる。見上げると、黒い雲が空を覆っていた。もしかしたら雨が降るのかもしれない。そんなことを考えながら、山崎は目的地へ向けてゆっくりと歩く。

そうして山崎は、娘の墓への前へやってきた。

「久しぶりだね。ほら、クリスマスプレゼントだ」

膝を折つて山崎は、娘の墓前に駅前で買つてきたクマのぬいぐるみを置く。

山崎の娘『希美<sup>のぞみ</sup>』が死んだのは、三年前の今日。クリスマスの晩だった。山崎の妻は希美を産んでもすぐに他界。それから五年間、山崎は一人で希美を育ててきた。愛妻を失つた山崎にとつて、希美

は人生の全てとも言えた。

が、希美は今、土の下で眠っている。

「……ふつ」

山崎は娘が眠る墓を撫で、ため息をついた。『うしてクリスマスに墓参りするのは一回目になる。そして恐らく、今後も自分は、こうして渡すあてのないクリスマスプレゼントを買い続けるのだろう。そうして『妻と娘が待つ我が家』を夢想するのだ。

ふと、墓の前に置かれたぬいぐるみが動いた気がした。

「…………？」

山崎が再びぬいぐるみよく見ると、やはり、僅かだが動いている。凍えるように小刻みに震え始めたぬいぐるみは、徐々に震えを大きくしていく。何か不穏なものを感じ、山崎が後ずさった時、ついにぬいぐるみは墓の上からぼとりと落ち、そして、ぱたりと動かなくなる。

希美へのプレゼントに、一体何が起きたのか。

山崎は不安な気持ちを抱えつつ、ぬいぐるみに手を伸ばす。

『お、うさ　ん』

伸ばしかけた手が止まる。

山崎の耳に、聞き覚えのある声が届いたからだ。

忘れようがない、その声。それは

「希美……なのか？」

山崎の声に応えようとすると、クマのぬいぐるみはようやく立ち上がる。布製の両足をひきつかせ、山崎のもとへと歩み寄りうつとする。

だがクマのぬいぐるみは、小石に躊躇してしまった。山崎はとつとつ、ぬいぐるみを抱きかかえた。

『おとつ、わん』

「……希美」

間違いない。今、このぬいぐるみには希美が入っている。そういう

崎は確信した。

冷静に考えれば確証などない。そもそも山崎は幽霊や魂といったものを信じていない。

それでも山崎は、理屈や常識とはまったく別の所で『このクマのぬいぐるみは今この瞬間、娘である』と納得してしまっていた。

『おとうさん』

抱きかかえるぬいぐるみは、いつしかはなつからと言葉を話せるようになっていた。

「なんだい、希美？」

『ここ、さむい。いつしょに帰ろう』

「そうだね。早く帰ろうか」

山崎はこちらを見つめるクマのぬいぐるみに笑いかけ、靈園を後にする。気がつけば、空から雪がちらついていた。道路にもつらすらと雪が積もり始めている。

早く帰ろう。希美が風邪をひいてしまう。でも、ぬいぐるみは風邪をひくのだろうか。そんな事を考えながら、山崎はタクシーをつかまえようと大通りに出る。

『はやく帰らないと』

「ん？ なんだい希美？」

『おかあさんが待ちくたびれちゃうよ…』

それはどういう意味か。

山崎がそれを問う事は出来なかつた。

「これはダメだ。もう死んでる」

事故の通報を受けてやってきた救急隊員は、道路に倒れ伏す男を一目見てそう結論した。

「なあ、なんかおかしくないか？」

同じく隣で男をしていた隊員が呟いた。

「ああ、確かに違和感がある」

「だよな。なんていうか」

救急隊員はぽんと手を打ち、クマのぬいぐるみを大切そうに抱きかかえて息絶えた男を見て、思わず漏らす。  
「 すげえ、幸せそうだ」

【完】

(後書き)

サクッと読める作品を田指して書きました。

楽しんで頂けましたでしょうか。

短い物語ですが、感想などを頂けると嬉しいです。

所属しているサークルHPでも他の掌編を掲載しております。

電子書籍発信サークル【結晶文庫】

<http://kessonsho-bunko.style.coocan.jp/index.html>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4901v/>

---

クリスマスプレゼント

2011年10月9日11時17分発行